人間文化創成科学論叢　第11巻　2008年

両親の幼稚園に対する期待の実態調査

菊　池　知　美*

A survey on parental expectations toward preschool programs

KIKUCHI Tomomi

abstract

The purpose of this study was to investigate what parents expect from preschool programs. Pilot Study tried to construct a scale to measure parental expectations toward preschools. Based on weekly observation of children at a preschool, interviews with their teachers, and open-end questionnaires filled in by mothers, the parental expectations were hypothesized to involve four dimensions of children's competencies: intellectual abilities, good classroom attitude, sociability, and interactions. In Main Study, fathers (N=310) and mothers (N=326) completed a questionnaire and a factor analysis of the scale resulted in a four-factor structure representing parental expectations for a child to develop intellectual abilities, good classroom attitude, basic life habits and social activeness. Further analysis as to whether parental expectations toward preschools are related to a child' s birth order and a level of family income revealed that mothers tend to have higher expectations to the first-born child' s basic life habits and social activeness, whereas fathers from lower family income are more concerned with the child's classroom attitude.

Keywords : parents expect, preschool, child's birth order, level of family income,

問題と目的

近年、幼稚園・保育所等の幼児教育から小学校への円滑な子どもの移行をめぐって、さまざまな研究がなされるようになってきている。特に「小１プロブレム」と呼ばれるような一斉授業からはみ出してしまう新入学児童の存在（佐々木、2001）が表面化し、野口・鈴木・門田・芦田・秋田・小田（2007）は、幼児教育から学校教育への移行における諸問題が指摘されていることを挙げ、幼稚園・小学校の教師間では同じ語を対象としながらも、語の受け止め方や理解に相違があることを示唆した。また、菊池（2008）は幼稚園から小学校への移行期に子どもの追跡調査を行い、両者間には生態環境と子ども間でなされる相互調節のしかたに齟齬が生じていることを明らかにした。すなわち、幼稚園では名指しでの声かけや詳細な指導が行われていたのに対し、小学校では特定の子どもに対してではなく学級全体に方向性のみを指導するような環境構成が行われていたことから、就学後の子どもは自身で考え判断を迫られてもなかなか行動が起こせず、学級全体に遅れをとらせるような状況が見られたのである。そこでこの要因のひとつとして母親による「小学校に入った時にきちんとやっていけるように」（菊池、2008）をはじめとする「保護者からの期待」が問題提起された。就学準備への期待が幼稚園教師の指導等に少なくない作用を及ぼしていたためである。

こうした幼稚園児を持つ保護者の期待について、町田・中澤・秋田（2003）は３～５才の幼稚園と保育所の保

キーワード：両親の期待、幼稚園、子どもの出生順位、家族の収入

＊平成18年度生　人間発達科学専攻

護者を対象に保育所保育指針、幼稚園指導要領に関連した項目から保育内容に関する期待調査を行っており、「戸外でのびのび遊ぶ」「人の話をきちんと聞く」「きまりの大切さに気づく」「歌や楽器の楽しみを味わう」「自然のしくみに疑問を持つ」「ひらがな等の読み書き」「数や簡単な計算を覚える」といったカテゴリーを示唆した。さらに、保護者の期待と保育者側の実践度について、両者は対応しているが個々の項目を比較すると「動物とふれあい命の大切さに気づく」「地域の人々と関わったり親しみを持つ」等は保育者のみが実践できていると評価し、両者にずれが見られた。金子・三浦・中沢（1991）は、幼稚園を指導内容により３つのタイプに分けその母親を対象に幼稚園に対する要望を調査したところ、母親の要望は幼稚園の教育内容とほぼ一致していることが確認された。また、幼稚園教育内容についての期待・意識について山本（1990）は、幼稚園を公立・私立と大規模・小規模幼稚園に分け、公立・私立の小規模幼稚園の保護者は遊びの保育を願い、私立大規模幼稚園ではさまざまな内容の指導をしてほしいという期待が多いことを示唆した。

また、子どもの出生順位についてDunn and Kendrick（1982）は、親の第１子と第２子以降ではその対応の仕方が異なる点について述べている。さらに、国民生活白書（内閣府、2005）において出生順位別にみた出生数を2004年と1975年で比較すると全出生数に占める第１子の割合は増加する一方、第２子、第３子以降の割合は各々減少している（平成17年版、白書は18、19年版も発行されているが出生順位に関する記載はないため引用）。つまり、時勢としては「子どもは１人のみで、より大切に、その分、期待も注ぐ」とする両親が増加していると思われる。同様に近年では、子どもは結婚－性の当然の結果ではなく人生の選択肢のひとつであり、経済的な理由によっても子どもを持つかどうかの判断が異なることが柏木（2001）によって明らかにされている。親が期待も含めて子どもについて考える時、経済的な要因は重要なポイントとなる可能性があるといえよう。日本においては「夫は仕事、妻は家庭」（新谷、1998）といった考えから主たる収入の担い手は夫（父親）だとされる傾向にあるが、他国では母親（妻）の収入も含んだ「家族の収入および財産」という立場からそれらが子どもの発達過程にどのような作用を及ぼすのかについて研究がなされている。Eric Dearing & Beck A. Taylor (2007) は、発達が順調である子どもとそうでない子どもを対象に、家族の収入が発達早期の子どもにさまざまな発達刺激のレベルを規定することを明らかにし、低収入で質の悪い家庭環境の子どもにはその影響が大きいことを明らかにした。また、Yeung、W. Jean & Conley、Dalton（2008）によると家族の財産状況は、幼稚園児よりも小学生の学習成績に強く関連し、さらに、小学生では読解よりも算数の成績に強く結びつくことが示されている。いずれにしても親の子どもに対する期待は、その時々の家庭の状況や時勢に作用されていると考えられるだろう。本研究では親の幼稚園への期待とこうした家庭の要因（経済要因と出生順位）がどのように関連するかについても検討を試みる。

なお、これらの子どもの期待に関する研究では従来、母親が対象にされることが多く、父親については十分に検討がされてこなかった。子どもの発達にとって両親の要因が重要であることは自明のことであり、親の発達期待についても両親を対象とした測定が必要であろう。本研究では両親の幼稚園に対する期待の内容と構造について明らかにし、両親ともに使用可能な尺度開発を行う。さらに、作成された尺度を用いて測定された両親の幼稚園への期待と経済的な要因、出生順位の２つの要因との関係について検討する。

予備調査

目　的

両親の私立幼稚園に対する期待の実態について、その具体的な内容と種類について焦点をあてて検討し、尺度を作成することを目的とする。そのためにまず、各学年（年少・年中・年長）の教師に対し、親との面接、家庭から提出される調査書、登園・降園時に母親と交わされる会話を情報源にインタビューを行い、それらをカテゴリー化する。さらに、両親に対してこれらのカテゴリーを示唆した上で自由記述式質問紙調査を行うが、これは両者の情報を得た上で尺度作成に結び付けたいためである。また、対象とする期待とは、両親が直接子どもに対して抱く期待ではなく、幼稚園に対して抱くものとする。

方　法

対象　都心にあるＡ幼稚園（私立）の教師をインタビューの対象とした。各学年１人ずつの教員歴は年長（13年目)、年中（７年目)、年少（11年目）であった。さらに、Ａ幼稚園の母親（年長６人・年中３人・年少２人）の計11人を教師のインタビューから得た内容を検討するためにその対象とした。

時期　教師へのインタビューは、200ｘ年12月から200ｚ年３月までの４ヶ月間で各教師に対し１ヶ月に３回ずつ、計12回行った。そのうち、親との面接をもとにしたインタビューは200ｘ年12月から200ｚ年１月（３回）にかけて行い、調査書をもとに行ったインタビューは200ｚ年１月（３回）に、また、登園・降園時に母親と交わされる期待に関するインタビューは毎回行った。さらに、Ａ幼稚園の母親に自由記述式質問紙を配布した（200ｚ年３月)。同月中に回収されたすべての質問紙の疑問点は即日のうちに連絡をとり聞き取りを行った。

手続き　教師に対するインタビューはメモをとるとともにテープレコーダーに録音し、即日テープおこしをした。また、園が行う親との面接や調査書に記載され表明された園への親の期待や、通園時に親自身によって自然発生的に語られた園への期待に関する発言も分析資料とした。Ａ幼稚園では全員の親と１年に１回（７月）親と面接を行っているので、そこで親から語られ、教師によって記述されたノートから親が語った幼稚園への期待に関する部分を教師に読み上げてもらった。また、学年開始時に親が園に提出した調査書（住所や既往歴等の記入）の中にある「幼稚園への要望」（幼稚園に望むこと、期待することをお書き下さい）欄を同様に読み上げてもらった。さらに、Ａ幼稚園では園バスがないため毎日往復、そのほとんどが母親によって送迎がなされている。よって、その場で語られる園への希望・期待についても筆者が聞き取りを行い、記録した。以上の３つの情報源（教師へのインタビュー、親面接時と調査書にみられた期待、送迎時に親によって語られた期待）から得られた期待はカテゴリー化され、母親への自由記述式質問紙実施時に活用された。母親に対する自由記述式質問紙は筆者の知り合いを通じて配布した。質問の内容は教師のインタビューにより得たTable １、２、３の期待内容をカテゴリー化したものすべてを挙げ、カテゴリーごとに「幼稚園児の親としてＡ幼稚園に期待するものは何ですか、両親の考えを具体的に書いて下さい」とした。また、「幼稚園には～を促してほしい」「幼稚園には～を教えてほしい」といった書き方を例文として加えた。なお、本研究のデータ収集と利用については園の責任者や保護者から許諾を得ている。

結　果

各学年の期待内容とカテゴリー　各学年の教師のインタビューから得られた幼稚園に対する期待をTable １、２、３に示す。カテゴリー名は「授業態度」（教師の話を聞く態度や課題に対する積極性・理解等)、「学習」（小学校の教科に直接・間接的につながると思われるもの)、「社会性」（家庭とは異なる社会の中で周囲と歩調を合わせていくために必要だと思われるもの)、「人間関係」（主に友だちとの良好な関係を育み、維持するために必要だと思われるもの）である。

尺度作成　両親を対象に行った自由記述式質問紙調査は教師によるインタビューから得られたTable 1、2、3の４つのカテゴリーに沿って行われた。その際、「小学校に入学した時に困らないように」といった内容はカテゴリー化できないため調査から外した。案出されたのは、

授業態度５、学習５、社会性７、人間関係４、計21項目（Table ４参照）であったが学習に対する期待のうち「個性を伸ばしてほしい」が１人による意見であったため除外し、計20項目の尺度とした。また、幼稚園の教師へのインタビューで得られた期待項目と両親への自由記述式質問紙調査から得られたそれとでは、同様の内容であるのにもかかわらず両者の属するカテゴリーに相違が生じる場合があった。しかし、情報収集のための両者への調査であり、目的は両親の期待を明らかにすることであるため両親の自由記述の内容を優先し、最終的に20項目から成る期待項目を尺度とした（Table ４参照)。

Table 1　幼稚園教師が受けた母親からの期待（年少組）

期待内容	カテゴリー
積極的に物事に取り組めるようにしてほしいと思う	授業態度
ひらがなが書けるようにしてほしいと思う	学　習
個性を伸ばしてほしいと思う	学　習
季節の行事や自然等の体験をさせてほしいと思う	学　習
本の読み聞かせをたくさんしてほしいと思う	学　習
ルールを守れるようにしてほしいと思う	社会性
トイレの自立ができるようにしてほしいと思う	社会性
身のまわりのことをできるようにしてほしいと思う	社会性
団体生活に慣れるようにしてほしいと思う	社会性
周りに迷惑をかけないようにしてほしいと思う	社会性
友だちと仲良く遊べるようにしてほしいと思う	人間関係
友だちに対して思いやりを持てるようにしてほしいと思う	人間関係

Table 2　幼稚園教師が受けた母親からの期待（年中組）

期待内容	カテゴリー
小学校に入学した時に困らないようにしてほしいと思う	全般
課題時に集中できるようにしてほしいと思う	授業態度
おしゃべりをしないで先生の話が聞けるようにしてほしいと思う	授業態度
積極的に物事に取り組めるようにしてほしいと思う	授業態度
遊びの時間を多くとってほしいと思う	学　習
ひらがなを書けるようにしてほしいと思う	学　習
個性を伸ばしてほしいと思う	学　習
本の読み聞かせをたくさんしてほしいと思う	学　習
団体生活に慣れるようにしてほしいと思う	社会性
時間の切り替えができるようにしてほしいと思う	社会性
周りに迷惑をかけないようにしてほしいと思う	社会性
ルールを守れるようにしてほしいと思う	社会性
身のまわりのことをできるようにしてほしいと思う	社会性
落ち着きを持てるようにしてほしいと思う	社会性
人との関わりの中で自分の気持ちを表せるようにしてほしいと思う	人間関係
友だちと仲良く遊べるようにしてほしいと思う	人間関係
友だちに対して思いやりを持てるようにしてほしいと思う	人間関係

Table 3　幼稚園教師が受けた母親からの期待（年長組）

期待内容	カテゴリー
小学校に入学した時に困らないようにしてほしいと思う	全般
課題時に集中できるようにしてほしいと思う	授業態度
椅子に座って先生の話が聞けるようにしてほしいと思う	授業態度
積極的に物事に取り組めるようにしてほしいと思う	授業態度
本の読み聞かせをたくさんしてほしいと思う	学　習
ひらがなを書けるようにしてほしいと思う	学　習
周りに迷惑をかけないようにしてほしいと思う	社会性
ルールを守れるようにしてほしいと思う	社会性
身のまわりのことをできるようにしてほしいと思う	社会性
時間の切り替えができるようにしてほしいと思う	社会性
落ち着きを持てるようにしてほしいと思う	社会性
友だちに対して思いやりを持てるようにしてほしいと思う	人間関係
友だちと仲良く遊べるようにしてほしいと思う	人間関係
人との関わりの中で自分の気持ちを表せるようにしてほしいと思う	人間関係

Table 4　両親からの期待項目

学習	ひらがなの読み書きができるようにしてほしい
	簡単なたし算・引き算ができるように促してしてほしい
	英語に慣れるように促してほしい
	昼食やトイレ以外等の時間は遊びの時間にしてほしい
	個性を伸ばしてほしい
授業態度	おしゃべりをしないで先生の話が聞けるよう促してほしい
	落ち着いて座っていられるよう促してほしい
	自分の作業に集中できるよう促してほしい
	時間通りに行動できるよう促してほしい
	ルールを守って生活できるよう促してほしい
社会性	友だちと足並みそろえて行動できるよう促してほしい
	身のまわりのことを自分でできるよう促してほしい
	あいさつや返事をできるよう促してほしい
	善悪の区別ができるよう促してほしい
	物を大切に扱うことを促してほしい
	新しいことや何に対しても興味を持つ機会を与えてほしい
	行事などで積極性を育めるよう促してほしい
人間関係	友だちとスムーズに関われるよう促してほしい
	自分の考えや意見を言えるよう促してほしい
	ケンカ等で仲直りしたり折り合いをつけることを促してほしい
	困った友だちを見た時，慰めの気持ちが持てるよう促してほしい

本調査

目　的

予備調査で得られた両親の幼稚園に対する期待項目の構造を分析しさらにそれらの期待と出生順位、家族の年収との関連を父親・母親ごとに検討することを目的とする。

方　法

対象　2002年に開始された子どもに良い養育環境プロジェクト（菅原・酒井・松本・伊藤・岡林・内田）の2007年度調査の一部で、2002年10月１日から2002年３月31日までに首都圏某市で誕生した５歳児（年中児）に対して行われた。初回調査時にプロジェクトの母集団として登録されたのは643名（男子329名・女子314名）で、平均年齢は父親が35.63歳（SD＝5.06）、母親は33.70歳（SD＝4.00）であった。また、職業については父親が事務技術51%、技能作業16.9%、販売・サービス9.2%で、母親が主婦・無職72.6%、事務技術16.2%であった。本調査では、予備調査における幼稚園教師からのインタビュー並びに母親への調査等から作成した期待尺度をもとに分析を行うため保育所等を除き、公立・私立幼稚園に通う子どもをもつ親にその対象を限定した。さらに、予備調査のインタビューにおいて３学年の中で一番幅広い期待内容を包括し、数量においても一番多くの期待が寄せられていたことから年中児である5歳児をもつ父親と母親に絞り込んだ。最終的に分析対象となったのは、636名（父親310名・母親326名）である。

手続き　本研究では予備調査で作成した「両親の幼稚園に対する期待尺度」を用いる。また、前掲したプロジェクトの「養育環境と子どもの発達に関する調査票」の中で母親が回答した子どもの出生順位と父親・母親の年収を利用する。調査は、2007年4月から９月にかけて行われた。

調査内容と分析方法　「幼稚園に対する両親の期待尺度」は20項目から成り、各項目は５段階（「とてもよくあてはまる（５点)」から「全くあてはまらない（１点)」で評定を求めた。出生順位は第１子と第２子以降に分け、年収については「ご家庭の去年１年間のおよその年収について教えて下さい。ボーナスを含め、税込みでお答え

下さい」と母親に質問し、100万円未満とそれ以上は100万円の幅を、さらに800万円から1200万円以上は200万円の幅を設定した。最後に「わからない」という選択肢も含めた。父親と母親各々の回答を合計したものを家族の年収とし、「わからない」という回答が一方にあった場合は分析の対象としない。なお、本研究の統計処理の計算にはSPSS15.0を使用した。

結　果

幼稚園に対する両親の期待の構造　幼稚園に対する両親の期待20項目について、主因子法による因子分析を行い、４因子を抽出した。因子間に相関があることが予想されたため、因子軸の回転には斜交回転（プロマックス法）を用い、結果の解釈には因子パターン行列を適用した。次に項目を精選するため、いずれかの因子について負荷量が.40未満の２項目（４・９）を削除し、残った項目について因子分析から項目削除まで一連の作業をもう一度繰り返した。さらに負荷量の低かった３項目（10･11･12）を削除し、残った15項目について因子分析から項目削除まで一連の作業を繰り返したところ、Table ５に示すような結果を得た。

第Ⅰ因子は、「行事などで積極性を育めるよう促してほしい」「ケンカ等で仲直りしたり折り合いをつけることを教えてほしい」といった項目に負荷量が高く、課題等へ向かう際の積極的な姿勢や円滑な人間関係を育むことを期待していると解釈できることから「対外活動積極性への期待」と命名した。第Ⅱ因子は、「落ち着いて座っていられるように促してほしい」「おしゃべりをしないで先生の話が聞けるよう促してほしい」といった項目から成っており、授業中の態度や姿勢についての期待内容であると解釈できることから「授業態度への期待」と命名した。第Ⅲ因子は、「あいさつや返事をできるように促してほしい」「善悪の区別ができるように促してほしい」といった項目に負荷が高く、社会生活に対応できるよう子ども自身の行動を律する期待内容であると解釈できることから「基本的生活習慣への期待」と命名した。第Ⅳ因子は、「簡単なたし算・引き算ができるように促してほしい」「ひらがなの読み書きができるようにしてほしい」といった項目から成っており、学習に直接結びつく期待内容であると解釈できることから「学習への期待」と命名した。

Table 5　両親の期待因子分析

	項　　目	因子Ⅰ	因子２	因子３	因子４
18	ケンカ等で仲直りしたり折り合いをつけることを教えてほしいと思う	**0.86**	0.05	-0.07	-0.05
19	困った友達を見た時, 慰めの気持ちが持てるよう促してほしい	**0.83**	-0.05	0.1	0.02
17	新しいことや何に対しても興味を持つ機会を与えてほしいと思う	**0.71**	0.05	0.05	-0.01
20	行事などで積極性を育めるよう促してほしいと思う	**0.68**	-0.02	0.08	0.08
6	落ち着いて座っていられるよう促してほしいと思う	-0.02	**0.94**	-0.04	0
7	自分の作業に集中できるよう促してほしいと思う	0.03	**0.83**	0.05	-0.04
5	おしゃべりをしないで先生の話が聞けるよう促してほしいと思う	0.03	**0.85**	-0.05	0.01
8	時間通りに行動できるように促してほしいと思う	-0.01	**0.68**	0.11	0.08
14	あいさつや返事をできるように促してほしいと思う	-0.06	0.03	**0.92**	-0.01
16	物を大切に扱うことを促してほしい	0.21	-0.08	**0.78**	-0.03
15	善悪の区別ができるように促してほしいと思う	0.17	-0.02	**0.71**	0.03
13	身のまわりのことを自分でできるように促してほしいと思う	0.12	0.2	**0.6**	-0.04
2	簡単なたし算・引き算ができるように促してほしいと思う	-0.05	-0.05	0.03	**0.97**
3	英語に慣れるように促してほしいと思う	0.15	0.06	-0.16	**0.72**
1	ひらがなの読み書きができるようにしてほしいと思う	-0.07	0.02	0.1	**0.82**

累積寄与率（%）70.84

因子間相関	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ
因子Ⅰ	0.57	0.75	0.28
因子Ⅱ		0.61	0.41
因子Ⅲ			0.28

アルファ係数は、第Ⅰ因子が.88、第Ⅱ因子が.91、第Ⅲ因子が.91、第Ⅳ因子が.88であった。これらから尺度の信頼性は十分高いと考えられ、以下の分析では各因子の粗点の合計を項目数で割った得点を各因子の得点とする。

次に、因子間相関を検討したところ、「対外活動積極性への期待」と「基本的生活習慣への期待」間はr＝.75で中高程度の正相関が見られた。また、「授業態度への期待」と「基本的生活習慣への期待」との間にはr＝.61、「授業態度への期待」と「対外活動積極性への期待」との間にはr＝.57、「授業態度への期待」と「学習への期待」間にはr＝.41と中程度の正相関が見られた。しかし,「学習への期待」と「対外活動積極性への期待」間にはr＝.28、「学習への期待」と「基本的生活習慣への期待」間にはr＝.28と各々低程度の相関となった。

家族の年収・子どもの出生順位と幼稚園に対する期待との関連　次に、家族の年収と子どもの出生順位が、どのように両親の幼稚園に対する期待に作用しているのかを分散分析により検討した。国税庁（2007）による男性の全年齢平均年収539万円と同様に女性の271万円の合計810万円を父親と母親の合計年収とし、800万円を境に年収が高い群と低い群に設定した。また、子どもの出生順位についても第１子群と第２子以降群を設定した。

まず、父親の幼稚園に対する期待を従属変数として、家族の年収（高・低）および出生順位（第１子・第２子以降）の２要因２水準の分散分析を行った（Table 6）。その結果、各期待において有意な交互作用は見られなかったが、「授業態度への期待」で家族の年収に有意な主効果が認められた（F（1、214）＝5.00、p <.05）。つまり、父親においては家族の年収が低い方が「授業態度への期待」に高い得点が得られる結果となった。

次に同様に、母親の幼稚園に対する期待を従属変数として、家族の年収（高・低）および出生順位（第１子・第２子以降）の２要因２水準の分散分析を行った（Table 6）。その結果、各期待において有意な交互作用は見られなかったが、「基本的生活習慣への期待」、「対外活動積極性への期待」において出生順位に有意な主効果が認められた（F（1、261）＝4.02；F（1、261）＝4.46、ともにp＜.05）。つまり、母親においては、第１子の子どもに対して「基本的生活習慣への期待」、「対外活動積極性への期待」へ各々高い得点が得られる結果となった。

Table 6 収入高低・出生順位別幼稚園への期待得点

収入	高群		低群		
順序	第１子	第２子以降	第１子	第２子以降	
群名	高１群	高２群	低１群	低２群	主効果
父親	M	M	M	M	
学習	8.2	7.55	7.95	7.8	
	2.68	2.99	2.37	2.67	
授業態度	12.04	11.04	12.46	12.36	収入
	2.53	3.15	2.42	3.15	P＜.05
基本生活	13.71	13.23	13.9	13.86	
	2.45	3.13	2.34	2.48	
対外活動	13.45	12.64	13.7	13.5	
	2.23	3.05	2.34	2.34	
母親					
学習	6.73	6.67	6.72	6.59	
	2.87	2.74	2.64	2.67	
授業態度	12.7	12.38	12.21	11.88	
	3.06	3.28	2.76	2.99	
基本生活	14.26	13.99	14.25	13.27	出生順位
	2.63	2.76	1.86	2.86	P＜.05
対外活動	14.29	14.07	14.11	13.02	出生順位
	2.46	2.44	1.91	3.15	P＜.05

考察

本研究の目的は、両親の幼稚園に対する期待を測定する尺度を作成し,その構造を検討することであった。因子分析の結果、「学習への期待」「授業態度への期待」「基本的生活習慣への期待」「対外活動積極性への期待」の４つの因子が見出された。さらに、それぞれの因子に付加量の高い項目を合計し下位尺度化のアルファ係数においては充分な信頼性が確認された。加えて、項目作成の時点から現場の母親および父親の意見を取り入れたため、先行研究と比べ、文脈に沿った尺度を作成することが可能となった。

また、家族の年収が高い群と低い群、および子どもの出生順位を第１子と第２子以降に分け、幼稚園に対する期待との関連を検討した。その結果、出生順位に関しては母親の基本的生活習慣、対外活動積極性への期待において第１子であることがそれらの期待を高める要因となりうることが示された。よって、学習、授業態度への期待は出生順位を問わず幼稚園に対し向けられているのとともにそれらは就学準備により関連する内容であることが示された。また、父親は幼稚園の時点ではすべての期待において出生順位にとらわれていないことが示唆された。一方、家族の年収に関しては、父親の授業態度への期待についてのみ年収の低い群がより期待を高めうることが示された。

本研究では両親の幼稚園に対する期待の尺度開発を行ったが、近年では認定こども園の開園等によって、幼保一元化への流れが増す傾向にある。つまり、期待に関する尺度においても今後は幼稚園だけでなく、保育所をも包括し、その上で文脈に沿う尺度が必要となるであろう。また、本研究で明らかにされた各々の期待について、その先に出現すると思われる親の満足感等にも注目していく必要があるであろう。

文献

Dunn, J. & Kendrick, C. (1982). Sibling : Love, Envy and Understanding. Cambridge, MA : Harvard University Press.

Eric Dearing & Beck A. Taylor. (2007). Home improvements : Within-family associations between income and the quality of children’s home environments. Journal of Applied Developmental Psychology, 28, 427-444.

金子智栄子・三浦香苗・中澤　潤. (1991). 幼児教育は何を期待されているかⅡ：幼稚園のタイプによる保護者の意識と家庭でのおけいこごとについて. 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 103-104.

柏木恵子. (2001). 子どもという価値　少子化時代の女性の心理. 東京：中央公論新社.

菊池知美. (2008). 幼稚園から小学校への移行に関する子どもと生態環境の相互調節過程の分析：移行期に問題行動が生じやすい子どもの追跡調査. 発達心理学研究, 19, 25-35.

国税庁. (2007). 年齢平均別の平均給与. 民間給与の実態統計調査結果18年確報.

町田和子・中澤　潤・秋田喜代美. (2003). 園長・保育者と保護者の保育内容・方法に対する認識の分析（1）. 日本保育学会第56回大会発表論文集. 62-63.

内閣府. (2005). 子育て世代の意識と生活. 平成17年版国民生活白書.

野口隆子・鈴木正敏・門田理世・芦田　宏・秋田喜代美・小田　豊. (2007). 教師の語りに用いられる語のイメージに関する研究－幼稚園・小学校比較による分析－　教育心理学研究, 55, 457-468.

佐々木宏子. (2001). 幼稚園と小学校の連携教育に関する問題と目的. 鳴門教育大学学校教育学部付属幼稚園研究紀要第35号, 鳴門教育大学学校教育学部付属幼稚園, 徳島, 1-13.

新谷由里子. (1998). 結婚・出産期の女性の就業とその規定要因：1980年代以降の出産行動の変化との関連より. 人口問題研究, 54(4), 46-62.

山本 和美. (1990). 幼稚園教育内容・方法等に関する調査研究(VI)：保護者の意識調査(2)　幼稚園教育の内容についての期待・意識. 日本保育学会第43回大会発表論文抄録, 272-273.

Yeung, W. Jean & Conley, Dalton. (2008). Black-White Achievement Gap and Family. Child Development, 79, 303-324 .